

謹告

各位の渴望されて居りました故本多日生上人御撰述に依る本經祖書要文全部が掲載された勤行方軌としての法華經要品がいよいよ清朝新活字を用ゐて見事に出来致しました。又日生上人が先年入念に弘通用として謹書し置かれし大曼荼羅御本尊は授與願出の方に感得者心得を相添へ、便宜お願ひ致します。此御本尊と要品があれば、子々孫々迄も修行上には百パーセント疑ありません。殊に要品は日蓮主義心髓たる本經祖書要文全部ありますから、自家用には勿論、布教用にも、施本用にも、洵に適當と存じます。

故本多大僧正撰  
法華經要品 並本經祖書 壹部  
要文集 改正定價 金五拾錢  
送料共

御本尊 大特別用 中普通小型佛壇用 小懐中用

授與御希望の方は願書提出の事書式用紙は御報次第差上ります。

勤行作法 壹部 金拾錢 送料共

百部以上御注文の時  
は御望に依り貴名額  
込み致します。

一册 金貳拾錢 送料五厘  
半々年 金壹圓貳拾錢 送料共  
一ヶ年 金貳圓貳拾錢

▲御申込ハ總テ前金ノ事  
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
▲御精居ノ場合ハ必ず新膏共直ニ御  
通知ノ事

昭和八年九月廿四日印刷納本  
昭和八年十月一日發行  
(第四百六十三號)

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
編輯兼 發行所 磯部滿事  
印刷所 鈴木日雄  
東京市品川區南品川二ノ一八一  
印刷所 都印刷所  
電話葛輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團  
電話牛込五三三六番  
電話東京九四二〇番

目次

聖訓摘要	日生上人
日蓮教學講座(第二回)	河合陟明
日什上人諷誦章講話(其五)	梶木顯正
旅記	磯部滿事
非常時の國民精神作興	
本部團報並に各地教信	
寄附團費誌料領收	

第三十八年十一月號





聖

語

波斯匿王、佛に白して言さく、世尊よ、勝義諦の中に世俗諦ありや、不やこ。

世尊即ち偈を説いて言はく

一 二諦は常に即せず

解心に無二を見る

二 二を求むるに得べからず

二諦一なりと謂ふに非ず

一も亦た得べからず

解に於ては常に自ら一なり

諦に於ては常に自ら二なり

此の一二を了達して

眞に勝義諦に入る

——仁王經二諦品——

聖訓摘要

日生上人

四條金吾殿御返事

神と佛と、佛と佛との差別こそあれども、釋迦をすつる心はただ一なり。(續編遺文錄)

これは日本の歴史の事を述べられて、始め釋迦牟尼佛の教が日本に渡つた時、釋尊の金銅の立像と、一切經と、お坊さんごこの三つの物を石濟の王様が日本に貢獻して來た、所が最初の間は之れを日本に入れるが善いか、入れないが善いかといふことで、中々争ひが起つた。その間にいろ／＼疫病が流行つたり、烈しい疱瘡が流行つたり、天災があつたりして災難が競ひ起つた。それから後遂にこの佛教を崇めることに相成つたのである。でお釋迦様といへば穩かな慈悲深い佛であつて、どのやうに粗末にしても罰も當るまいと先づ普通考へる、それはお釋迦様自身罰を當てるといふ考は無からう、悪い事をすれば益々可哀さうぢやといふのがお釋迦様の精神である、それを日蓮聖人が茲に解釋したのである。釋尊は罰を當てる積りはないけれども、釋尊を粗末にすれば其處に災難が起つたり、いろ／＼の事が出來



るのである。それで始めは日本の神に依つて釋迦牟尼佛を捨てたのであるが、近頃は佛敎の名に依つて違つた佛の名前を擔ぎ出して來て、釋迦如來を捨てるやうになつた、それを「神と佛と、佛と佛との差別こそあれ」と言はれたのである。最初日本で釋迦牟尼佛を捨てたのは、日本の神様といふ名に依つて捨てた、後に佛敎徒が捨てたのは、佛といふ名に依つて釋迦牟尼佛を捨てた、そこで神と佛との違ひはあるけれども、釋尊を捨てるといふ心は一つである。如何なる場合に於ても釋迦牟尼佛を輕蔑し、釋迦牟尼佛を斥けるといふことがあつたならば、必ずやその報ひがあるといふことを書かれた。この文の前

後には、その事に就いていろ／＼詳細な事が擧げられて居る。  
 私がこの文を引證したのは、罰が當るとか當らぬといふ意味よりは、日蓮聖人が釋迦牟尼佛を如何に中心として信仰をして居られるかといふ事を見るのである。佛敎徒でありながら、往々日本の神様を大切にする考から、お釋迦様を蔑ろにするやうなことを言ふ者がある、日蓮主義者の中にも「日本の神様が釋迦牟尼佛に現はれたのぢや」といふやうなことを言ふ者があるが、それは違ふ、日本の神様も崇尊であるけれども、これは日本の國の神様である、「お釋迦様は天竺に出現したから……」といふやうな事を言ふけれども、そんな人間の世界の西だの東だのといふ方角などに依つて區別せらるべき佛ではない、小さく見ても娑婆世界の教主である、之れを大にして行けば盡十方法界三世を貫いて無限の大活動をなさる所の絶対の本佛であらせられるといふのが日蓮聖人の信仰である。それは決して日本の神

様をそれが爲めに輕しめる譯ではない、日本の神様は日本の神様として、日本の建國の祖とし、日本の國の隆運をお守り下される神様として、之れを崇めて行けば宜いのである、唯だ何もかも日本の神様で一切の宗教的要求を満たさうとすれば、其處に缺陷を生じて來る。又他の宗教を信するが故に日本の神様を邪魔にするやうになつては、國家の歴史が成立たぬことになるから、日蓮聖人のはその餘程よく行つて居る。この美味が判らぬやうでは智慧が廻り兼ねるといふものぢや、人間といふ者はその工合の好い所を行かなければならぬ。砂糖を入れろといへば無闇に甘くしてしまふ、醬油を入れろといへば無闇にガブ／＼に醬油を入れてしまふといふのでは御馳走は出來ない、砂糖も入れなければならぬ、油も入れなければならぬけれども、その加減といふものが大事ナンである。日本の神様を大切にすると言へば、何でもかでも神様ぢやと言つてやつて行くやうなことでは「砂糖を入れないと美味しく出來ない」といふので、豆腐を一挺煮るのに砂糖の三斤も入れる、それは薄馬鹿といふものぢや。左様な事が今日はどうも能く判つて居ないやうに思はれる。日本人は賢いやうな顔をして居るけれども、今まで行つて來た事は「砂糖が大事ぢや」と言へば無闇矢鱈に砂糖ばかり入れて居る、それではいかぬ。日蓮聖人の敬神觀念といふものは非常に善く現はれて居る。そこで一方に於ては、日本の神様を信するからと言つて、佛敎を斥けるといふことはいけない、さういふ事になるとそこに非常に災禍が起つて來る。又佛敎の中でも「佛様ならどの佛様でも善いぢやないか」といふけれども、さういふ譯のものではない



釋迦如來は全く我が佛教を開かれた所の佛様である、他の佛様ナンといふものは、皆な釋迦如來の説法の上に現はれた所の言葉である、その根本の佛様を忘れてはならぬといふ日蓮聖人の主張は、佛教のあらん限り、どうしてもそこに基いて來なければならぬものである。

鍛はぬ金は熾んなる火に入るれば疾く銹け候、氷を湯に入るが如し。銅などは大火に入るれども、暫くは銹けず、是れ鍛へる故なり。(編遺文錄)

これは信仰を鍛へよといふ事を教へられたので、一通り信じて居るといふだけでは、實際の事が起つた時分に動搖をする、表面同じやうに見えても、例へば綺麗な庖刀であるとか、洋刀であるとかいふやうな物も、磨ぎすましてあれば非常によく切れるやうに見え、立派に見えるけれども、大體鍛へて無いさういふ庖刀とか、洋刀のやうな物は、少し強い火の中に入れたら直ぐ銹けてしまふ、それではいかぬ所が日本の名刀といふ物は火の中に入れても容易に銹けない、それは鍛へ上げてある所の金であるから銹けないのである。日蓮主義の信仰は出刃庖刀や、洋刀のやうに鍛へない、唯だ綺麗に磨ぎすまして切れさうに見えるやうなものではいかぬ、眞の日本刀の如く鍛へ上げて、少々位の火に入れても銹けないやうな鍛錬を積んだ信仰でなければならぬ、それを四條金吾に教へられたのである。その信仰の鍛錬といふことは、人に依つていろ／＼にある譯で、商人なら商賣の事に就てやはり信仰の鍛錬といふことが必要である、唯だ信心をすれば商賣が繁昌すると思ふてやり居る者は、不景氣になると一度に信心を捨

てるやうになる、さういふやうに僅かな事に依つて信仰が動搖するやうなことで駄目である、さういふ事は日蓮聖人は大嫌ひである、「そんな者は自分の所に來て呉れるな」といふ風に考へられて居つた。それであるから日蓮主義者は日蓮聖人の氣に入るやうな信仰で行かなければならぬ、それには十分に信仰といふものを鍛錬して實際の事に當つて行かなければならぬ、唯だ書物の研究や理窟だけではいかぬ、自分が實際經歷する事の上に信仰が緩みかけたり動搖しかけたりする時、そこに大いに奮發して強い信仰を現はして鍛錬して行く事が大事であらうと思ふ。「説教を聴きに來なくなつたから信心が衰へた」ナンといふ人があるけれども、さういふ譯のものではない、家庭に於ても、商賣に於ても、到る處に於て信仰を鍛錬すべき機會は頗る多いであらう。寧ろ世の中に起るいろ／＼の信仰に反對のやうな事柄を材料にして、自分の信仰といふものを磨いて行かなければならぬ。詰らぬ友達と一緒になつて、信仰を嘲けられるやうな話を一つか二つ聽かされれば、信仰がフラ／＼になつてしまふといふやうなのは自分の信心が根本から駄目ナンである、さういふ時には「俺の信仰を動搖さすやうな話を或る友人がしたが、併しそんな事に依つて信心が動搖してはいけない、却つて反撥的に信仰が強くなるやうに段々訓練して行かなければならぬ」と自ら覺悟しなければならぬ、それを日蓮聖人が茲に言はれたのである。これは實に日蓮聖人の生粹の教訓であると思ふ、鍛はぬ金は熾んなる火に入れればスラ／＼と銹けてしまふ、丁度水を湯に入れたやうなものである、信する／＼と言つても本當に鍛へてない者は、僅



かな事に依つてヘナ〜と溶けてしまふ、それは日蓮聖人の嫌はれる所だらうと思ふ。

### 四條金吾殿御返事

これは極く短い御文章で、別段摘出する所はありませぬ。

### 松野殿御返事

鷺目一貫文、油一升、衣一、筆十管給ひ候。今に始めぬ御志申し盡しがたく候へば法華經釋迦佛に任せ奉り候。先立てより申し候、但在家の御身は餘念もなく、日夜朝夕南無妙法蓮華經と唱へ候て、最後臨終の時を見させ給へ、妙覺の山に走り登り四方を御覽せよ、法界は寂光土にして瑠璃を以て地とし、金の繩を以て八の道をさかひ、天より四種の花ふり、虚空に音楽聞え、諸佛菩薩は皆常樂我淨の風にそよめき給へば、我等も必ず其の數に列ならん、法華經はかゝるいみじき御經にておはしまし參らせ候。(一編遺文錄)

これは松野殿からいろ〜御供養を受けられたことに就て禮を述べて書かれたお手紙でありませぬが、その法華の行者を助けられた功德は、日蓮が之れを推し測ることは出来ない、どの位の功德かといふこ

とは法華經釋迦牟尼佛のお考に任せて置くより致し方がないと言はれた。これも洵に有難い事で、丁度基督の門人があちらこちらに傳道をして、非常な困難と闘つて教を弘めて歸つて来た時分に、基督は一つも褒めなかつた、弟子は「どうも基督が自分の功績を認めて呉れない」と言つて不平な顔をして居つた時に、基督が「イヤさうではない、お前の手柄をこの基督が褒めたのでは濟まない、汝の功業は天にまします神様の前に記されて居るものぢや」と言つたので、弟子が非常に悦んだといふ事がある。日蓮聖人はそんな基督の言葉などを御覽になつた譯でも何でもないけれども、やはり宗教感情といふものは古今東西洵に能く似て居るもので、「今あなたがいろ〜この法華行者を助けて下さる功德は、日蓮が褒めたのでは事足らぬと思ふから、お釋迦様の御考にお任せする」といふ事をお書きになつた。さうして尙ほ續いて言はれるには「この間から申したやうに、在家の信者の心得としてはやはり信仰が根本であるから、少し位の教義や理窟に囚はれてはいけない、何處までも南無妙法蓮華經と朝晩唱へて、さうして愈々命が終つたならば幸福なる生活に進み行くのである」といふのでその淨土の光景は如何にも美しい有様が茲に説かれて居る、これは唯だ「淨土は美しい」といふだけではない、法華經の壽量品から現はれて来た淨土觀といふものは、如何にも立派なものであつて、美の實在が眞理の上から説明されて居るのである。阿彌陀様の淨土が綺麗だとか、基督の天國が立派だとかいふやうな事は、今日の哲學的論證としてはちよつと困る問題なのである、天國の實在とは如何、安養世界の實在とは如何といふ事に



なると、哲學上の問題では答辯がうまく出来ぬ。法華經に至つては、日蓮聖人が今茲に同じやうな美しい言葉で言ふて居られるけれども、これは淨土の實在論として非常な立派な根據を有つて居るのである。それは素人にはちよつと判らぬ。どちらも花がふると言へば同じやうに花がふると思つて居るけれども花がふるかと思ふて行つて見れば實際は降らない、淨土に行つて見れば事實降らないといふことが判かる、愈々となれば違ふけれども唯だ字に書いてある所では同じである。安養淨土が西の方に在ると言つても、どうしてその淨土が存在して居るかといふ事は、少しも哲學上の根據を有たないものである。基督教の天國にして見た所がさうである。「天國があると言つても何處にあるか、どういふ意味に於てあるのか」と言つたならば、「それは在ると信するんちや」といふだけの話で、少しも根據がない。私の友人に基督教の牧師があつて、始終口癖のやうに「自分は天國に行く天國に行く」と言ふから、私が或る時「天國といふのはどんな工合の所か」と聞いたら一向説明が出来ない。「そんな粗末なことでは君が天國に行くナンて嘘だらう、本當に考へて居るんちやあるまい」と突込んだら「マアそんなものです」と言つて苦笑して居つたが、これは決して私の悪口でも何でもなく、實際の話である。宗教の實在の世界といふ事は、宗教學上に於て一番困難な問題である、淨土の説明でも天國の説明でも高天原の説明でも、これが哲學的理論と宗教的信仰と結びつけて説明が出来たならば、世界最大の宗教家である、所がそれだけのことは中々出来ない。佛教の中に於ても法華經の壽量品に於て始めてこの淨土の實在といふもの

が判かるのである。だから日蓮聖人の御文章の中にもある、同じ法華經でも迹門と本門の違いといふものは、水と火ほどの違ひがある。「土の前後いふばかりなし」と言つて、國土論に於て同じ法華經でも迹門では國土の實在が説けない、本門壽量品に於て眞の本國土妙といふものを説き得たと言はれて居る、これはどうしても専門の研究に依つて十分にその味ひを見ないと判らないのであります。丁度今年三十年になる兒玉日容といふ人があつた、これは宗教の大學者である、この統一閣が元と常林寺と言つた時分に此處で亡くなられたのであるが、私共は大部分は日蓮教學はその人から教はつた。此處で死なれる前に、一週間ほど前から小林日容といふ大僧正になつて居つた人がある、あの人と私と二人がこの世界の淨土實在論に就て日容師から段々話を聞いた、それで問題を出されては、歸つて夜通し小林師と相談をして、翌日考へた事を言つて話をする、所が「未だいかん」と言つて中々承認して呉れなかつた、丁度一週間の終りに「マアさういふ事で宜からう、尙ほその點に就ては今後も怠らず研究せよ、それは斯ういふ風に研究せよ」といふ事を教はつた、その日に日容師は臨終したのであります、最後の遺訓として吾々に大事な事を教へて呉れた位のこと、諸君がボンヤリ外から入つて来ていきなり、その味ひが判かる譯は無いけれども、その結構なものが茲にある。本當の熱烈なる信念があつて、自分が最期の時日蓮聖人の言はれるこの事が眞實の意味に於て信ぜられなかつたならば、本當の安心立命は無いと私は思ふ。「最後臨終の時を見させ給へ、妙覺の山に走り登り四方を御覽ぜよ。法界は寂光土にして



瑠璃を以つて地とし、金の繩を以つて八の道をさかひ、天より四種の花ふり、虚空に音楽聞え」といふやうになつて、眞の淨土が其處に實現して來るのである、それが吾々の理智、哲學的研究の上に於ても間違ひが無いといふ確りしたものがあつて、そこに信仰が燃えて來るやうになれば、愈々臨終するといふ時になつても、實に悦び勇んで進み行くことが出来る譯である。宗教の信仰の生命はそこにある、基督教から天國に行けぬといふことになり、佛教から淨土が無くなつてしまふといふことになつたならば、淺草の活動寫眞を皆焼いてしまつたやうなもので、誰も集まる者はない、宗教に集まるといふものは、その永遠實在の世界の幸福なる状態、それが確に存在するといふ事を確信する時、そこに信念の基礎があるのである。又なまぬるい哲學ナンといふものは、そんな實在の世界ナンといふものは無いと言つて嘲つて居つたけれども、それは未熟な哲學者が言ふことである、美の實在といふものは大體哲學上の原理として認めなければならぬ。現はれし物はみな存在するといふ事を今日の哲學は承認する、宇宙に現はれる美といふものは實に澤山ある、花が咲くにしても月が出るにしても、この宇宙に燦めいて居る美といふものは無限なものであるといふ事が判かる、それは全然無い物が出すのではない、だから非常な完全なる美が宇宙に存在するといふ事は、哲學として承認しなければならぬ。その存在して居る世界に吾々が居住して、其處に座を占めてその美を味はふ所の身分となるといふのであるから、眞理は反對することの出来ないものである、唯だそこ迄考へが及ばないだけである。美といへば上野の山にある櫻の花か、芝公園の紅葉ぐらゐるしか無いと思ふて、其處に行つて首でも吊つたら「彼は永遠に紅葉の下で死んだ」といふやうな事を言ふて居る、そんな事で美は永久に存在するといふ事は出来ない、藝術家ナンといふ者はそんな者で、兎角狂人じみた者である。

兵衛志殿御書

今の池上本門寺になつて居る所は、池上右衛門太夫宗仲といふ人の館であつたので、それを日蓮聖人が御臨終の二週間程前にお寺にして、開堂式は日蓮聖人御自身でなさつた。池上康光に二人の子供があつて、共に日蓮聖人を信じて居つた、その一人がこの御書を贈られた兵衛志といふのである。父の康光といふ人は鎌倉の良觀房を信じて居る、そこで良觀房がいろ／＼と手を廻して、二人の子供の中どちらでも法華經を捨て、日蓮を捨て、親の言ふ方に就く者に家督相續をさせるといふことを仰しやいといふ智慧をつけた、そこで康光がその通りに子供に話した。兄の宗仲夫婦は信仰が決定して居つたけれども、弟宗長の方は本人はグラつかんけれども奥さんが少しグラついて居つたものであるから、家督相續が出来るといふ所から夫の袖を引いて、「信仰などやめて家督相續をした方が宜しいぢやありませんか」といふやうな事を言つたものであるから、弟の精神がグラつきかけた、そこで日蓮聖人がそれに贈られた教訓が澤山ある、兩人が信仰を貫けば親もそれに従つて行くだらうけれども、一方が動けば親はそれ



きり救ふことが出来ないといふので、いろ／＼忠告をせられた。その忠告に依つて弟の方も亦思ひ返して、最後まで法華經の信仰をやり遂げた、それに對して贈られたのがこの御書である。

何よりもあはれに不思議なる事は、大夫志殿と殿との御事不思議に候。(縮刷遺文錄)

「大夫志」といふのは兄の事で、「殿」といふのは弟の方の兵衛志の事である。その兄弟の關係が洵に不思議だといふのは、一方が法華經の信仰を捨てさへすればその方に家督相続をさせるといふ事になつて居るのであるから、餘程その間の關係といふものは面倒な問題である、それを日蓮聖人が茲に書いて居られる。

常さまには世末になり候へば、聖人賢人も皆かくれ、たゞ讒臣佞人、和諛曲理の者のみこそ國には充滿すべきと見えて候へば、喻へば水少くなれば池驛がしく、風吹けば大海静かならず、代の末になり候へば早魃疫病、大雨大風吹きかさなり候へば、廣き心も狭くなり道心ある人も邪見になるとこそ見えて候へ、されば他人はさて措きぬ、父母と夫妻と兄弟と諍ふ事、獵師と鹿と、猫と鼠と、鷹と雉との如しと見えて候。良觀等の天魔法師等が親父左衛門の大夫殿をすかし、和殿ばら二人を失はんとせしに、殿の御心賢くして、日蓮が諫めを御用ひ有りし故に、二の輪の車をたすけ、二の足の人をになへるが如く、二の羽の飛ぶが如く、日月の一切衆生を助くるが如く、兄弟の御力にて親父を法華經に入れまいらせさせ給ひぬる御計ひ、偏に貴邊の御身にあり。(縮刷遺文錄)

實にこれは愉快な文章であります、末の代になればいろ／＼間違つた事が盛んになつて、親子兄弟互ひに利益の爲に相争ふものであるのに、あなた方は池上一門の財産を「法華經を捨てる」と言ひさへすれば譲受けることが出来る場合に臨んで、兄は無論夫婦心を一つにして信仰は變へないと言ふけれども弟のあなたが「イヤ、私は信心の事は考へ直します」と言へば家督相続をすることが出来た。然るに日蓮聖人がそれは考へものであるといふ注意を與へられたのを用ひて、兄弟心を協せて信仰を貫かれた爲めに、遂に父の康光も法華經の信仰に入つて、今に池上本門寺といふあの寺が残るやうな事蹟が現はれたのである。若もこの兵衛志が自分の女房の言ふ事を聞いて信仰を退轉すれば、それきり今の池上といふものは出来なかつた譯である。それを日蓮聖人が非常に褒められて、利益の爲めには互ひに相争ふ世の中に、利益を眼中に置かないで正義の信仰を立て通し、親も正法法華の信者にしたといふことは、如何にも目出度いことであると仰しやつた。人生の問題は古今どなく同じやうな事が始終現はれて來るのであるから、斯ういふ點も能く考へて置かなければならぬと思ふ。

★

★

★

★



# 日蓮教學講座 (第二回)

文學士 河合 陟 明

★ ★ ★ ★

我等、罪重くして百千劫にも御佛拜まず、生死重ねて苦み受けぬ。さはれ御佛いま我等を救はん爲に、まのあたり世に出でましぬ。重き罪惡しき障も方便もて除き去り、我等を御法に立たしめ給ふ。人々の願に随ひ佛は身をば示し給へど、機縁未だ到らぬ人は煩惱の雲にさえられて、佛の御意を見奉らず

★ ★ ★ ★

(華嚴經)

## 第一章 佛陀の人格的諸相

### 第一節 佛陀の恩徳 (續)

み佛が此の人の世に生れまして、いと大いなる無上の覺を開き給ひしは、もと／＼本佛の應現として其の實證としてさる事ながら、我が人間歴史の第一の大事實であり、寔に人類文明の最大の恩人にまし

ますのであつた。カピラエ國の王子として、生れつき聰明睿智の悉達太子が父母の慈愛恩寵の中に人となり、當時の學問技藝文武の徳を廣く深く積まれたのであるが、年と共に人生に對する深刻な求道反省は王宮の歡樂の裡にも益々深まり行き遂に父王と母君との盡きの恩愛をさへ後にして、さては又納妃と

王子出生の絆をすら、此の絶ち難き愛着をすらも後にして、一大勇猛の覺悟を固め、秋の満月の夜半愛馬カンタカに身を托し御者車匿をつれて王宮を脱し一夜に二十餘里を馳せ、天明の頃アノーマ河の岸邊に至つて悲涙に沈む車匿等と別れを告げ、遙かに山深く雪山の仙居に向つて去り給ふたのであつた。思へば太子若し世に在せば、やがては五天竺を御すべき轉輪聖王ともなりぬべき身が、一朝忽ちに入山學道の志を發し、三界住むに家無き無住の行者と爲り、黒山より雪山に至るあらゆる隱者の森を訪ひ、遍く王仙(王族の出家)天仙(波羅門の行者)の蓋蓋を叩き樹下石上到處「十遍處定」の冥想を凝らし、雪山の仙生活に於て試みざるもの無く、古仙の心苦行に於て鍊られざるものは無かつた。あゝ千古の雪を頂くヒマラヤの連嶺を仰ぎては久遠の眞理を探り、洋々として涯しなき恒河の流を眺めては永劫の思に耽り、星移り物變り、修行功成りて既に理想

の大輪廓を成就し給ふたのである。太子の行者 瞿曇としての苦行は其の前半を雪山に過し、今や深酷に其の理想の體現を得ん事を望み、雪山より南平原に下つて尼連禪河を渡つてウルビルワ村の樹林に入り、更に具に苦行の練磨を試み、六星霜の朝な夕な遂に「過ぎし世の如何なる出家も行者も、又は今の世來るべき世の如何なる出家も行者も、斯かる激しき苦痛を受けた者は無いであらう」といふ苦行をまて鍊られたのであつたが、然も猶超世の法は得られず、神聖な覺には達せられなかつた。今や太子は斯かる苦行のみが苦惱を去り解脱に導く唯一の行に非ざる事を悟り、尙一步を進めて運心工夫を凝らすに非ざれば到底其の目的を達する能はざるを思ひ、去つて尼連禪河に沐浴し、村娘の捧ぐる乳糜を受け、食して後氣力を恢復し、前方に一道の光明を認め、進んで往いて樹林の北、伽耶の里なる大畢波羅樹の下に結跏趺坐して端然寂定、將に菩薩悉達太子の道



を成ぜんとするや、すはこそと煩惱魔障の軍勢内外より押寄せ來り、此處に「此の世の教主」と大魔王との間に激烈なる精神的大戦闘は開始せられたのであるが、然も危機絶頂に達したる菩薩は金剛寶座動ぎ無き降魔の快擧に依つて心の平和に達し、初禪より二禪三禪と次第に覺の段階を進みて第四禪定に入り、斯くて遂に大自覺位即絕對完全位の聖者覺者に必ず伴はるべき先づ宿命智を體得して自己生命の過去久遠の經過を知り、數々の宿世遠き世の事までも細かに想起し發得して無明を去つて闇を破り給ひ、次に天眼智を體得して生類の生死運命の進路を知り明かに衆生の生々死々する有様と、其の業に隨うて流れ行く様とを見給ふ「あゝ生死の苦海は廻り廻つて窮まり無く、果てし無き流に沈み深うて頼る處も無い」惡業を重ね罪障を積み聖者を誘ひ邪見邪念を懐いて惡道を廻る人々と、善業を積み功德を重ね、聖者に順ひ正しき見解と正しき信念とを懐いて善道

を諒かに審かに徹見し悟得し、此の「四諦」の理ゆいては「一念三千」の大真理これ佛陀覺者の正法なる事を禪かに深く味はれた。此處に無明は全く去り光明現前正念圓滿して佛陀大覺の慈智光は法界の闇を照破し見々として六合に漲り渡つたのである。斯くて菩薩は御年三十歳の十二月八日、曉の明星きらめく時、一大事の因縁こゝに熟し、三有生死の雲晴れて一如法界の眞心顯はれ、廓然大悟して大覺位に登り給ふたのである。此の時大地は大歡喜して六種に震動し、世界は遍く光明に輝き渡り、諸天の神々は雲の如くに集ひ來つて天華を雨らし天樂を奏で、世尊を禮し讃め稱へまつた。

限り無き妙法界は御佛の身に充ち満ちてとこしへに寂かなれど、人々の依り處ごと佛いま世に出てましぬ。  
佛世に出でまして正しき法を立てたまふ、その證悟は極み無く慈悲もて我等の惱滅し、量り無き欣

に行く人々々々を見給ひ、遂に彼等をして等しく皆共に、窮まり無き生死の流轉を解脱して滅びざる生命の淨境に入らしむ可く、みづから此の衆生の依り所と成らんと欲し給ひ、無明を去つて闇を破り、遂に解脱智を體得して、煩惱業苦を滅し盡す智慧の覺を以て、是は衆生の苦である（迷の果）、是は苦の集である（迷の因）、是は苦の滅である（解脱の果）、是は苦の滅に達する道である（解脱の因）と明かに知り給ひ、またはは煩惱であり（迷の果）、是は煩惱の集であり（迷の因）、是は煩惱の滅であり（解脱の果）、是は煩惱の滅に達する道である（解脱の因）と明かに知り給ひ、この明かな智慧に依つて心は渴愛の貪欲と無明の迷執とより脱れて、既に解脱したといふ智慧を生じ給ふた。即ち自己一心の覺を以て之を衆生の上に及ぼし、衆生の迷妄の有様と其の因果、及び其の迷妄解脱の有様と其の因果と、いはゆる「苦」「集」の現實と「滅」「道」の理想と

びを與へたまふ。  
日の光ものゝ姿を示すごと、み佛は今我等の爲に業の相を世に示し、まことの觀方に入れたまふ、愚かの闇に心憍り放逸に世を行く我等に、御佛は證悟の法を示して善き願と喜びに歸らしめたまふ我等が上無き依り處と爲りて御佛は世の苦を除きます、我等見まつらんと願はば望月の山に現るゝごと我等の前に現れたまふ。  
慈悲といふ慈悲のてだてを盡し、我等の身に入りて我等の心を調へたまふ、淨き眼の開けし者は見たてまつるに飽くことは無し、量り無き功德思へば大いなる歡び生る、そは御佛の力にこそ、暫くも御佛思へば永くもろゝの惱離れん、  
奇なる説光至れば世は悉く澄みゆきぬ、人の心は道に眼覺めて喜にこそ念は離れ、愚かの闇に自ひたる身も、智慧の燈に眼開けて淨き佛の御姿おがむ、



我等聖の樂に遠ざかり世の苦に沈み居れど、  
 今や御佛の淨き御法に心悅び安けくあり、もの  
 皆は空華なれど佛は我が光我が力なり、慈悲の雲  
 もて世を覆ひ法の雨もて潤したまふ、  
 限り無の惱の海を盡すはたゞ御佛のみ、大慈悲の  
 方便もて心の眼をぞ開きたまふ、底ひも知れぬ海  
 のごと法の功德に限り無し、樂ひ望みは皆聞かる、  
 さはれ御聲柔かなれど響は雷の如くなり、  
 佛正法を説きませば我等たゞ樂みに満ちぬ、その  
 御聲に心躍りて法の喜胸に溢る、  
 其の時佛の威神力に據つて大覺の道場菩提樹も亦  
 枝も葉も幹も七寶と輝き、又金剛の御座からは光が  
 十方に流れて普く至ての世界を照し渡つた。いま佛  
 の智慧は海よりも深く大空よりも廣い、其の御光は  
 恰く闇の世を照し世のあらゆるもの、相は宛かも澄  
 み切つた大海に大空の星が曇り無く其の影を印すが  
 如く、炳然として一時に御胸に現はれて居る、「海

印定中一時炳現」と云ひ「海印三昧」の禪定と云  
 ふは此の御覺の心境を稱するのである。げに世尊の  
 靜かな御心の海には、今此の様に總てのものが其の  
 明かな相を映し出して居る。此の境地は誠に何物を  
 以ても讃へ盡せるものでない。  
 菩薩羅曇は今や進んで佛陀と成り給ふたのであ  
 る。佛陀とは「覺者」の義である、自ら覺りて又他  
 をも覺らしめ、覺も行も——衆生の迷より覺に至る  
 菩薩の修行も今は完成し、是く成就し了れる覺の境  
 涯より歸つて衆生濟度に向ふ行きも——皆共に圓  
 満して窮盡す可からざるを「自覺覺他覺行窮滿」と  
 云ふ、又尊みて「世尊」——諸の人界世間中の最尊  
 ——と呼び奉る、時には「阿耨多羅三藐三佛陀」  
 と名づけ、譯して「無上正等覺者」と謂ふ、無上の  
 正しき覺を四方に等しく覺る完全と覺ると云ふの義  
 である、佛の悟を指して「菩提」即ち「正覺」又は  
 「無上道」と謂ふ、佛陀の成道は先にも言へる如く

世界人文史上の最高峰であるが、わけて印度宗教史  
 上最も記念すべき大事と成つたのである故、其の  
 聖蹟は悉く其の地名をも變へしむるに至つたので  
 ある。開覺の地伽耶の里は佛陀伽耶となり、其の樹  
 下に坐して覺り給ひし畢波羅樹は菩提樹と稱せら  
 れ、成道の前六年苦行のウルビルワ樹林は苦行林と  
 名づけられ、成菩提の前一度禪定の地をトして上  
 り、其處に住せる龍族の請に應じて、尊影を窟内の  
 石壁に映じ給ひし「留影窟」の峰は之を「前正覺山」  
 と謂ふ。あゝ我等の足をもて踏み得る此の地上に佛  
 陀の足跡が印せられて居るといふ事は、如何に尊い  
 懐しい事であらうか……。

かくて世尊は悟後に於て一旦寶座を去り、樹北に  
 至り菩提樹を望んで逍遙し給ふた、之を觀樹經行と  
 名づける、經行とは散步の義である、西より東に向  
 つて經行し給ふ事十八歩、一步々々に蓮華を生じた  
 と云ふ。而して後再び菩提樹下に還り禪定に入り給

ふ事七日、之を自受法樂の禪坐と稱し、また悟後の  
 觀念とも名ける、此の間は單に自受法樂の爲のみな  
 らず、自己の體得し實現したる大理想を如何にして  
 社會的に衆生の間にも實現すべきやを省慮し給ふた  
 のである、佛陀は實に轉法輪の次第と其の方法とを  
 熟思せられたのであつた。

然し此の時世尊の胸中は更たに大いなる惱みに襲  
 はれざるを得なかつたのである、「我が證りし此の  
 法は寔に寂かに勝れていと達し難く證り難い、世の  
 常並の人の常並の道理によつては到底達し得べくも  
 無い、奥深くして唯佛と佛とのみ、唯聖者のみの知  
 り得る處である。どうしてかの果敢なき欲の樂みに  
 のみ耽つて居る世のもろくの衆生に此の總ての  
 『貪り』の欲が淨まり、『怒り』の炎が消え、『痴  
 さ』の闇が失せたる、三毒の無明煩惱が照破し解脱  
 し盡されて、測り無き極み無き世の實相眞如が現れ  
 出でた涅槃の境を悟る事が出来やう、悟らしめる事



が出来やう、さすればたとひ此の法を説いたとして、彼等は了る事は出来ぬであらうし、只疑ひと不信とのみを増すに過ぎぬであらう。」世尊は斯く考へて、あゝ寧ろ法を説かず、疾く涅槃に入りなんとすら思ひ給ふたのであつた。然しもとゞ、憂に沈み迷に覆はれたる世間の衆生を救はんが爲にこそ世に出でませし御佛が、どうしてかくて止み給ふであらうぞ、此の時梵天は世尊の御意を知つて驚き嘆き、「あゝ世は亡びん、世は壞れん、佛は法を説かんともし給はず」と悲みに堪へず速かに梵天の世界より世尊の御前に現れ、一つの肩に衣を懸け右の膝を大地につけ、掌を合せて世尊を拜して申し上げた、「世尊よ、何卒法をお説き下さい、世尊よ、何卒法をお説き下さい、世には汚れに染まぬ智慧の眼を有つ者もありません、又たくひたすらに御佛を信じ奉る者もありません、若し彼等にして法を聞かないならば亡びて了ふでありませう、世尊説き給はく彼

等は必ず法を説り法を信じ奉るでありませう」先に摩竭陀の國には垢ある人々の邪まの法撒かれてありき、今こそ世尊よ不死の戸を開き不滅の門を開かせ給へ、かくて垢無き人に依りて證られたりし法を聞かせたまへ、峰の頂に立ちて周圍を見る如く、遍くすべてをば見たまふ者よ、賢者よ、聖者は法より成れる高樓に登りて悲みを離れたまへば、かの悲みに沈みて生と老と病死とに敗れたる世のもろろの人々を憐みたまへ、雄けき者よ、丈夫よ、戦に勝ちし勇者よ、債務なき人よ、無碍の人よ、起ちて世を巡らせたまへ、遍く世をば遊化したまへ、世尊、み法を説きまさらば、必ず證る者あらん世尊は梵天の請を知り、且つ人々に對する憐みの心より、その佛の慈眼を以て世間を眺め衆生の心中を見給ふに、心の曇の少い者、心の曇の多い者、利

き者、鈍き者、善き者、惡しき者、罪ある者、功德多き者、教へ易き者、教へ難き者などの種々の有様が宛かも青黄赤白等色様々の蓮華の水に生へるが如く皆深き泥地に根をば下せど、或る蓮は水に生ひ水に榮え水の面に出でず、或る蓮は水に生ひ水に榮え水の面に止まり、或る蓮は水に生ひ水に榮え水の面を出で、高く咲き香へるが如く、衆生の根機（心理状態）は色々次第を爲して明かに世尊の慧眼に映つて來たのである、そこで世尊は、

今は好し、耳ある者の聞いて信を得べければ、不死の戸をば彼等に開かん

と宣ふ。梵天は「世尊は私の請を容れ給ふた」と深く喜び、懇ろに世尊を拜して辭し去つた。

かくて世尊は梵天の勸請に應じて、その自覺證得し給ひし大理想を世に實現せんとするに臨み、先づ何人に對して之を宣説すべきやを考慮し給ひしに、佛意は曾て苦行を俱にせし同行の五仙に及び、茲に因

縁深き伽耶の御山を後にして、北進して迦尸の國鹿野園の仙人住處に向ひ給ふたのである。不死の法鼓はこゝ鹿園に始めて鼓たれ、如來無上の法輪は此處に始めて轉ぜられたのである。

かくして世尊は更に北上して途々舍利弗、目連、迦葉等の諸大弟子を得給ひつゝ、遂に故郷迦毗羅衛國に歸り給ひ、城外の樹林を遊履の僧園として、恩愛の契り淺からぬ父王と其の一族を教化せられ、父の淨飯王も叔母（養母）の摩訶波闍提も妻の耶輸陀羅も王子羅喉羅も其の他一門の人々多く此の時に入信化益を蒙つたのであつた。世尊が開覺成道の曉、一度びみづから登りつめし大覺の高嶺より再び歸つて人界の野に下り、濟世度生の説法に於て、其の初は五仙の歸依と爲り又諸弟子の歸佛と爲つたのであるが、然も世尊が道を北に取つて先づ故國への旅を思召されしを見れば、世尊の御意はおのづから窺ひ知らるゝであらう。即ち是れ最も大恩の因縁厚き



父母妻子一族有縁のはらからを先づ救護し濟度し報恩の道を行する事が常に毎に世尊の念頭を離れなかつた所であつたのである。かの父王等一族の悲涙號泣をも後にして秋夜王宮を脱出し、たゞ一介の出家無住の行者となり、「我れ若し無上菩提を成ぜずば死すとも歸らじ」と春風秋雨幾星霜死するにまざる苦行を経て、遂に大覺を成辨し、今其の無上の心靈の大寶珠を、還り來つて父母等に捧げ施し報ぜんとする世尊の胸中は如何計りであつたらう。今私は世尊の大恩を讚美し奉る此の文を草しつゝ、聖者にも亦此の心境のましませしを思ひ、遙かに遠き三千年の古——御佛の御心を慕ひ思ひて親子の情妻子の情の無限なるに想到し、そとる漂渺無限の感に打たるゝのである。

誠に聖者の悩みは徹底的に慈悲の悩みである、他の爲の悩みである、無我の悩みである。之に反して我々の悩みは自我の悩みであり、自愛の悩みである。しと見るは是れ我々凡心の迷ひであつて、聖者は曾て自己の爲には悩まないが、常に人の爲に悩みつゝあるのである、實に人の悩みを悩むのが聖者の本質的顯現である。佛陀といふ宇宙平等の大覺者に於て始めて慈悲平和の大恩教主たり得、此の慈悲平和の大恩教主に於てのみ眞に人の悩みを悩む聖者の悩みを見出し得るのである。我々にも深刻なる罪惡觀がある、之は罪惡を知りて自ら如何ともする能はざる悲哀の觀念である、聖者にも深刻なる罪惡觀がある、之は衆生の罪惡を如何にして救はんかといふ大慈悲の悩みである。然も我々が悩みに沈んで居るのは空疎の議論でなく實質の生の問題である、生の問題は今や迷ひと悟りとの中間に於て行き悩んで居るのである。我々は實に現實の悩みの海に漂ひながら、理想の救ひの舟を把へんとして居るのである。我々の是の如き悩みの姿は彌々深く聖者の心中に慈悲の炎を燃やしむるの材料と爲る計りである。

り、業苦の悩みである。智に於て悟り得る事の出来ない我々生類は、情に於ても悩みを去る事は容易に出来ないものである。我々が人界に存在し個性に繋がれて居る限りは、如何にしても此の悩みを去る事は不可能である、實は此の悩みを去る事を好まないものである、人間の本性は斯くも悩みに悩まされながらも、其の悩みを飽くまで味はんとする矛盾性を有して居るのである、そこで感性的悩みを離れ智性的迷ひを脱した絶大の聖者に對しては、屢冷眼を以て之に當らんとするに至るのである、

聖者には夢も悩みもあらずとや

いとも冷たき御心かな

どの歌の心も思ひ遣らるゝのである、個性的の我々の心より見れば聖者の心は如何に冷たきものかと思はるゝのである。然し全宇宙的の聖者の心から見れば、個性に固まりし我々の心は却て螢の火の如く微光無熱のものと感せらるゝであらう。聖者に悩み無

佛子等よ、誠に佛は内に大きな慈悲を抱いて一切の人を捨て給ふ事は無い、一人の人をも捨て給ふ事は無い、御心は煩惱の悩み離れて寂かに、常に人々を憐れし、時を失はずして人々を調へ給ふ。佛はあらゆる魔障を破りあらゆる邪道を降し、一切の世の中に往つて人々を導き、見る者を救はしめ利益を與へられる。佛は正しく憶念し奉る者があれば直ちに其の人の前に現れ、毎に人々の善の根を養ふて教化の時を失はず、自在の力に依つて種々に身を變へ人々の爲に廣く法を演べ給ふ。

また佛は眼の境を以て耳の境の佛事（佛のはたらき——衆生濟度のはたらき）を爲し耳の境を以て眼の境の佛事を爲し、眼耳鼻舌身意の六根圓融して一切の境界に於て佛事を爲し給ふ。また佛は盡くる事の無き功德の藏である、能く人々に信心を發させて歡ばせ、未だ道念を發さざる者には道念を發させ、既に發したる者には智慧と慈悲とを具へさせ、遂に



は尊き悟に導き給ふ。或は人々を教へて世間の中に在りつゝ佛の心に随はしめ、或は壽命の短き事と世間に樂みの無き事とを教へ、清き心もて佛を念すれば心眼に佛を見奉る事を説き、數々の苦みを除きて清き佛の道を起こさせ、放逸なる者をして淨き戒を持たしめ、一切の人々を攝め取つて深き佛の境界に入らしめ給ふ。

佛子等よ、佛の智慧は總ての義理りを知り、疑ひを除き、二邊を離れて中道に住り、總ての文字や言語を超え、一切の人々の心、行、煩惱、習性を知り、一念の中に三世の總ての諸法を知らしめす。譬へば大海が一切の色像を印す故に印と名づけられるやうに、み佛の正覺の智慧の海の中にも、一切の人々の心念や感覺が總て皆現れ出で、窮まり盡くる處が無い、故に佛を一切覺と名づけ奉る。

佛子等よ、譬へば日は出で、闇を滅し、總てのものを育て冷氣を除き、空を照して人々を饒み、池を照して蓮の花を開かせ、總ての色と像を現はし、そしてあらゆる世間の事を爲さしめる。何故かと云へば日は限り無い光を放つからである。佛も亦そのやうに惡を滅し善を育て、智慧の光は人々の幽冥を除き、大慈悲は彼等を饒んで證に至らしめ給ふ。また日は世を照してあらゆる器の水に影を宿するのであるが、其時一つの器が破れると日の影は現はれないが、其れは日の咎ではない、水の器が破れたからである。佛の圓かな智慧の日は一念の中に現はれて悉く一切の世界一切の人々を照して垢を除き、常に淨い心の器の中に現はれる。たゞ破れた器、濁つた心の人々は、常に「佛の法の身」を見ないから特に佛のおかくれを見て驚きを立て、初めて教はれるのである。其れが爲に佛は滅度を示し給ふ。然し其の實佛は生れず滅びず永くおかくれになる事は無い。佛子等よ、佛はたゞ人々を救はせたい爲に世に現はれ憂へ悲しみ慕はせたい爲に滅度を示される。其の實

佛は世に出でられる事も無ければ滅度に入られる事もない、佛は生に非ずして生を現じ、滅に非ずして滅を現じ給ふのである。何故かと云へば佛は法界のやうに常住であるからである。

み佛の御身は思ひ難し、色も相もいと妙にして比ぶるにももの無し、たゞ御教を受くる者のみ何處にも御相を見奉る、

み佛は普く十方に御相示せど、去りまます又來り給はず、されど佛の御願に依り人ごとごとく見奉る、

すべての國の微塵の中にも佛の自在の力を見、その聲は誓の海に震ひ、人々を調へたまふ、身と命とを惜まます常に佛の教守りて具さに忍ぶ行ひ勵まば、み佛の法を得ん、人の世のあだなる樂を離れ、大いなる慈悲の心もて總ての人々を救へかし、

迷の極みを滅ぼして佛は智慧の燈かゝげ、正法の

照して蓮の花を開かせ、總ての色と像を現はし、そしてあらゆる世間の事を爲さしめる。何故かと云へば日は限り無い光を放つからである。佛も亦そのやうに惡を滅し善を育て、智慧の光は人々の幽冥を除き、大慈悲は彼等を饒んで證に至らしめ給ふ。また日は世を照してあらゆる器の水に影を宿するのであるが、其時一つの器が破れると日の影は現はれないが、其れは日の咎ではない、水の器が破れたからである。佛の圓かな智慧の日は一念の中に現はれて悉く一切の世界一切の人々を照して垢を除き、常に淨い心の器の中に現はれる。たゞ破れた器、濁つた心の人々は、常に「佛の法の身」を見ないから特に佛のおかくれを見て驚きを立て、初めて教はれるのである。其れが爲に佛は滅度を示し給ふ。然し其の實佛は生れず滅びず永くおかくれになる事は無い。佛子等よ、佛はたゞ人々を救はせたい爲に世に現はれ憂へ悲しみ慕はせたい爲に滅度を示される。其の實

船や教の橋を設けてぞ、教ふべき人を救ひたまふ。かの生死の牢獄には、災まことにはかり無し、老と病と死の惱み競ひ廻りて日に夜にやまず、みづから深き法を解り専ら方便ある智慧を修めて、是等の苦みを除きたまふ、これ佛の境界ぞ、

いつはりの相に執はるゝ人は、まこと佛を見奉らす、すべてに執着の念無き人眞の佛を見奉らん、

南無妙法蓮華經 (續)

寫經

名古屋 大八木義雄

書きうつす一文字毎にみ言葉の

ふかき心の身にもしむかな

書寫したる法華經の奥にかきつく

わが筆の跡にくまなむ孫子らは

法の惠の深きいづみを



# 日什正師諷誦章講話 (其五)

梶 木 顯 正

(附 說)

## 其一、曼荼羅ト本尊ハ異ナリ

この「曼荼羅」といふことは「方壇」とか又は「道場」とか云ふ意味で、それには「調へられたる」と云ふことが條件である。言ひ代へれば曼荼羅とは「調へられたる道場」と云ふことである、その意味を極く平たく云つて見れば法華經の十界互具といふ思想、即ち迷へる衆生も、悟らんと勵む菩薩も已に覺つて御座る如來も、其妻は各別であるが根本的基本人格上から云ふならば「同一平等」也、と云ふ教學的立場からそれを具象化し表現したものが曼荼羅の圖であると見るのが最も正しいと思ふ、故にそれは繪であらうと文字であらうと何れでも差支は無い。更に云ふならば曼荼羅とは「聖家集會ノ處」とも云ふ、この「集會ノ處」といふのが平等觀の原理の上に立つた具象的表現の相である。曼荼羅とは何方かと云へば此の點にその重點があるのである。然るに「本尊」と云ふことになる。「絶

對的慈悲絶對的救濟」と云ふ事が其の中心根本となるのであつて、前の曼荼羅思想はその土臺となつてこの本尊教主如來の絶對的大慈悲の中に包含され了ふ。即ち「圓慈觀」といふ宇宙全體が有目的に轉ぜられて來る、で此處では積極的に「救ふ」ことが重點となるのである。前の曼荼羅顯現の場合の「必ず吾等は救はれる者である」といふ可能性を明した場合と「我れはそれを救ふ所の救ひ主である」と云ふことを顯はした本尊の場合とは「能くする者と能くせられる者」と云ふ譯けで全然意味が異なるのである。言ひ換へれば本尊は曼荼羅と云ふ立場土臺を無視しては顯示する事を得ないものではあるが、さうかと云つて曼荼羅のみを以つて直ちに本尊とすることは絶對に出來ないと言ふのである。

## 其二、寶塔、曼荼羅、題目、本尊ノ略稱

そこで古來から、この寶塔、曼荼羅、題目、本尊この四者は混合されて居るから一往その各々別の意味を了解して居らぬと不可ない。

寶 塔——であるが、之れは一切衆生を救濟し給ふ佛様がお住ひになる宮殿のことである。本文にも宮殿と云ひ心城と云ひ、住所と云つて居るのはそれが爲である。日蓮聖人が「寶塔サナガラ阿佛坊、阿佛坊サナガラ寶塔」と仰せられて居るのは、一ヶの阿佛坊を如來の住み給ふ社として阿佛坊といふ人の身體を通して日蓮を救ひ給ふのであるか、と言はれて居るが如く、社の意味である。



曼荼羅——とは前にも述べるが如く十界互具と云つて、下は地獄より上は佛界に至るまで相對的に其の本質は同一平等である、と云ふ哲學上の理窟を具體的に現はし示した相を云ふので、此處では「理に於ては一也」と云ふ佛性論或は平等論を現すが重點である。この點を深く了解して居らぬと誤りを起し易い。

題、目——とは南無妙法蓮華經といふ五字七字を云ふのであるが、この題目に對しては古來幾多の種類が有るかの様に想はせられて來て居る、例へば

- 一、本法と云ふ「三大秘法」の妙法蓮華經
- 二、是好良樂の妙法蓮華經
- 三、妙法五字の袋の中にこの珠を包み末代幼稚の頸にかけさしめ給ふと云ふ妙法蓮華經
- 四、眞理（宇宙法）としての妙法蓮華經
- 五、曼荼羅の中央に寫されて居る「妙法五字の光りに照されて本有の尊形となる」といふ妙法蓮華經
- 六、吾等凡夫が口唱する所の妙法蓮華經

が、之れ等の妙法蓮華經と云ふ題目も名が違ふやうに内容が違ふのだ、といふのではない。が然し斯くの如く名が幾通りも有ると云ふことは妙法蓮華經と云ふ題目の内容が、それ程に多含的であると

いふ事は一往は心得て居らねばならぬことではあるが、結局は之等幾多の題目も大別すれば左の二ツ

- 一は眞理として宇宙法としての妙法蓮華經
- 二は功德として良樂としての妙法蓮華經

と成つて終ふのである、でこの二ツの中吾等お互ひは何方を取らねばならないのか、と云ふことになるのであるが、その前に一體この二種と云ふ題目は違ふのか又は一所なのかと云ふ詮議をして見ねばならぬ。云ひ換へれば曼荼羅の中央に寫された題目と吾等が口唱する題目と一所か違ふかと云ふ問題である。中には此の二ツを違つたものだといふ者もあるがそれは間違ひであると予は云ふ。何故ならば吾等は救はれる者である、救はれる方の我れ／＼お互ひとしては如來御自身の上に二色の題目があつたとしても我れ／＼の上には二色あつてはならない。よしんば二色あつたとしても眞理（宇宙法）としてのお題目では直接積極的に吾等の爲に働いて呉れるものでは無いのであるから、我等は「救はれる者」と云ふことを前提として如來に因つて功德化された良樂としての題目功德聚としての妙法を取るの尤も至當である。だから吾等凡夫は曼荼羅の中央に書いてあらうがそれが宇宙法としての題目であらうが書いてあらうが口で唱へやうがそんなことに頓着する必要はない、學的立場からの斷定を除く他は本尊の主體たる教主如來をハッキリ信解し、確認し得たならば皆悉く救ひの綱である所の良樂功德聚の題目だと信念すればよろしいのである。言ひ換へれば皆口唱する題目と同一だ



と考へればよいのである。日蓮聖人が「事行の南無妙法蓮華經」と仰せられるのはそれが爲である。されば學的研究からするならば二ツあつても十あつてもかまはないが、信する立場からは絶対に一つでなければならぬのである、この場合の妙法蓮華經とは如來の大慈悲を込めたる功德聚であるのは勿論の事である。

本尊——これは宗教としての絕對者即ち「救ひ主」を顯示した處であるから救ひの權化である。救濟の權威は此處以外には絶対に無い、されば一往相對的立場から曼荼羅と云ふ形式に因つて十界互具の意味を説いて平等觀（汎神思想）を立てるが、更にそれを宗教的に「慈悲と救ひ」に一轉して、嚴として動かすべからざる差別觀の上に救濟者と被救濟者の別を示すのが此の本尊である。言ひ換へれば曼荼羅とは相對的平等觀を明にしたものであり、本尊とは絕對的差別觀を示したものである。之れを宗教學上から云ふならば曼荼羅は汎神思想であり、本尊はその汎神思想の上に立つ處の救ひの神（佛）であり、更に之れを日本の國體に見るならば、天皇と國民とは同祖であるが故に、情に於て全く父子一體であるが、義に於ては嚴然として君臣の區別があると全く同一義である。故にこの主師親三徳を垂れ給ふ本尊教主如來に對し奉つては、如何なる者と云へ共拜跪し奉るべきである。本尊とは「慈悲の流れ出る源泉救ひの根本なり」との信解確信が決定して居るならば迷ふ所は寸毫もないのである。今日未だ此の問題にコダワツテ正信に立つことを得ないと云ふのは、昔の餘にも字義のセンサ

クに深く陥ち込んだ結果生んだ弊風である。

### 其三、日蓮聖人ノ本尊觀

本尊に對する日蓮聖人の御説明としては、法華經を以つて本尊と云はれるかと思ふと、南無妙法蓮華經を本尊とすと仰せられる時もあり、釋迦如來を以つて本尊とすともあり、さうかと思ふと我等凡夫が本佛であつて、如來に本佛の御名を貸したのは凡夫の我等である。と云ふやうなことも仰せられて居る。然し斯うした説明上から問題の扱ひ方を遊すのは一見して直ちに相對論的本尊觀であることを知らねばならぬ。例へば日蓮聖人の御妙判に「釋迦多寶ノ二佛ト云フモ妙法ノ五字ヨリ用ノ利益ヲ施シ給フ時、事相ニ二佛ト現ハレテ寶塔ノ中ニウナヅキ合ヒ給フ」と仰せらるゝが如き其例である、是れは尤も注意を要する點であつて、大概は此處へ來て天台流に陥入るか、左もなくば妙法本佛論と云ふが如き似て難なるものとなり終るのである。大聖人が尤も高調力説されたる本尊觀としては、説明を目的としたる本尊では無くして、信仰體驗から味識し給ふた實感中の實感から告白遊された本尊である。それは龍の口に於て、伊豆の伊東に於て、佐渡の雪中に於て、それに依れば「慈父大覺世尊我が頭に宿らせ給ふ」と云ひ、或は「如來が船守彌三郎と生れ給ふて日蓮を助け給ふか」と云ひ又は「如來衣を以つて覆ひ給ふ」とか、復は「如來と共に宿するなり」等と仰せられたのみならず「壽



量品の佛（開述顯本し給ふた久遠）を知らざる諸宗の學者は不知恩の者なり畜生に同じ」とか、或は「壽量品の佛の天月暫らく影を萬水に浮べ給ふを眞の月の想ひをなして或は入つて取らんと思ひ或は繩を以つてつなぎ留めんとす」とも仰せ給ふ。「壽量品に建立する所の本尊は五百塵點劫（久遠無始）のその上より以來此土有緣深厚本有無作の三身教主釋尊也」と、これ實に聖人が御實感中の絶對的本尊觀の御告白である。

今日蓮門下の大部分は理窟でコネた本尊觀で、妙法蓮華經佛と云ふトテツモナイ處へ行つて了つて居る。大聖人が直感し實感し給ふ本佛如來は母の如き暖い慈悲心から、涙を流して吾等を愛し給ふ切れば血の出る佛様、即ち「一切衆生の異の苦は如來一人の苦なり」と仰せられる佛様である事は、此の聖人の告白し給ふ實際場面を心に浮べて想ひ見るならば、直ちに會得がゆく譯けである。然るにそれが未だ會得出來ずして彼れ是れ云つて居るのは増上慢の徒にして罪は己れ自身にある事を思ふべきである。お互ひはトラワル、所なく虛心坦懷壽量品の文意を正解すべきである。大聖人御實感の本尊とは之の壽量品の久遠本佛釋迦如來にして、それを細かく説明すれば「其本地は教主釋尊也例せば釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮べる影也」と云ふ一大統一佛に在ます世尊如來である。これ即ち大聖人の絶對本尊に對する根本觀であり歸結である、諸士迷ふこと勿れ。

#### 四、迹門ノ意ニ因テ二佛ヲ釋ス

次ニ釋迦多寶ノ二佛者、先迹門ノ意者、二佛居ニ一塔ニ者、境智不二之形

この段は同く迹門の經意に依つて、寶塔品の虚空會上に現はれた釋迦如來と多寶如來の二佛を解釋されたので、「二佛居ニ一塔者」とは前にもあるが如く、虚空會上の説相として寶塔品に顯示された多寶如來の寶塔の中に、分半坐與と云つて多寶如來が釋迦如來の爲に坐を半分分ち給ふ、そこで釋迦如來は塔中に入り給ふて一塔中に二佛が併坐し給ふた姿を指す「境智不二之形」とは境智は客觀と主觀と云ふも同じで、この境（客觀）智（主觀）の二が合一する所に始めて力用を生じて來る。其處で釋迦如來は智、多寶は境に當るが、形の上を見ると二であるが、その内面からすれば全く一である、と云ふ融通無碍の「而二にして不二なり」の理を形で示したものだ、との意である、それが法華迹門の二佛觀である。

#### 五、迹門ノ意ニ因テ分身ノ樹下ヲ釋ス

分身坐ニ樹下ニ者、利益周遍之相

これはやはり法華迹門の意に因つて寶塔品第十一の説相に顯はれた所の、十方より來集せし釋迦如來



の分身佛が、大地に坐した姿を釋するので、「分身」とは、如來の衆生を救はんとし給ふ慈悲心の現れとして發し給ふ手であり、足であり、假の姿を云ふ。「坐樹下者」とは平坦なる大地に、分身の諸佛、諸菩薩が列坐した姿を指す。(釋迦如來等は高く高座に在ますに對して云ふ)「利益周遍之相」とは、廣く分身の佛菩薩が大地に列坐し給ふ姿は、釋迦如來の大慈悲が、下界の一切衆生の上に廣く周遍即ち平等にアマネクと云ふので、行き亘つて居る有様を證した相であるとの意である。

六、同三佛ノ釋ヲ結ス

三佛三身ノ表德迹佛果成之質也

此の文は釋迦牟尼如來、多寶佛及十方分身の三佛が、各互ひに一身宛をお現はしになつて而も其の三者が、一ツ所に各獨自の姿と立場を以つて整然と在ますそのお姿は、前段にある如く境智の而二不二を現はしたもので、即ち一身即三身の旨を含んで、その各々の内面的德をお表しになつた相だと云ふ、それを「三身ノ表德」と云ふ。「迹佛」とは從本垂迹と云つて、無限の壽命を持つてゐる無始の古佛が其の根本身を暫らく秘して、人生五十年の限りある壽命の上に悟を得給ふた姿を示されし佛、即ち絕對境の佛が、相對の世界へ姿を現はした處を云ふが今の場合は一往因位の菩薩が佛界果上に昇つたこの意である。「果成」とは果は結果の意で佛と成つた、と云ふことであるが、迹佛果成とあるから迹の菩薩の位で佛道を修行して遂ひに果を結すんで佛の位に登り、即ち佛と成つたとの意「質也」とは、その相を現はし示した所であるとの意である。迹門に於ては未だ本因本果を明さないで即ち迹因迹果を説く分際だから中間的迹の菩薩が同く迹の果に達した相を顯した處だと云はれるのである。之れは上の三佛の釋を結ばれたのである。

七、法華本門ノ意ニ因テ開迹顯本ヲ明ス

次本門ノ意者、廢始覺顯本覺、破迹佛立本佛、本地難思之境智用、無作三身之色心業也

上に迹門段の意を以つて三佛を釋した故に、更に進んで本門の意に因つて三佛を釋するのである。「廢始覺」とは法華經には破廢開の教義といふのがあつて、此の三義に依つて法華經の眞價を發揮せんとするのであるが、今は其中の廢の義を説くのである。始覺とは釋迦如來が十九にして出家し三十にして成道(悟りを開)し八十にして涅槃し給たと云ふ、つまり有限の佛にして、覺りし始めのある佛には必ず涅槃と云ふ終りがある譯けであるそれを指して云ふ。前の迹門の本無今有(迹門にては未だ根本佛本無)の佛に對して本門の本有常住(之れは久遠の根本より)の佛を顯はさんとするので、廢とはその有始始覺の幕を廢する、取り除く、その廢するのは本覺を顯す爲である。「顯本覺」本覺とは始覺の反對で無

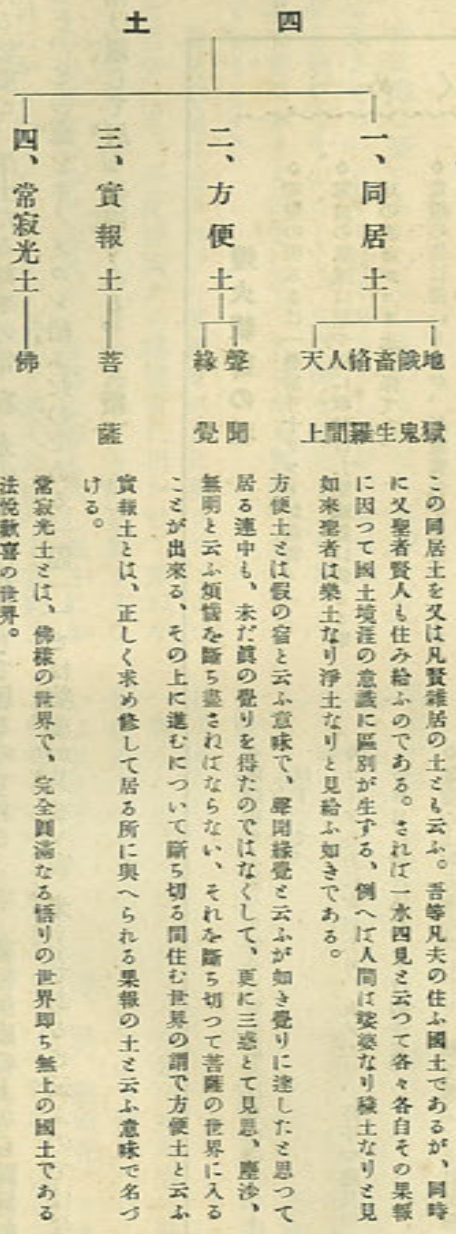


始無終常住の意で、悟つた始めがあるのでは無く、本から覺つてゐたのであるとの意で、今はその根本から覺つてゐた佛なる旨を顯すべく、前に廢したから今度は開き顯すのである。「破・述佛」即ち述佛と云ふ（根本佛に對すれば）述門の三佛を打ち破つて「立本佛」で三世を利益し給ふ久遠の根本佛を建立する。然るにその「本地」即ち根本佛の立場を云ふ「難思」で不可思議の境界で到底その境も、智も（境智にあり）用も共に凡夫の吾等には思ひ難く、究め難い所であるとの意、而かもそれ等は皆「無作三身」と云つて作さんとすれば成り、作すまじとすれば成らず、と云つた自在無碍のハタラキは即ち法爾自然本來本有の備つてゐる用（佛三身のこと）でそれを無作と云ふ。それが其儘「色心業也」即ち始覺述佛の表皮を破廢して眞の根本本佛といふ正體を顯はして見れば、その本佛の色心とて身と心の全體から業とて起り發して居る、即ち行爲又は御生活そのものであるなり、と云ふこと、無始無終常住の久遠本佛釋迦如來の根本體を本門壽量品の經意に依つて明されたのである。

### 八、同虚空會ヲ評釋ス

#### 所ニ虚空ニ者、示此土體一之常寂光

この文は、同じく述門寶塔品の場面を、本門の經意から評釋遊ばされたので、寶塔が高く大地より上に在りますのは、佛様の御國土である常寂光土と、吾等凡夫の國土たる娑婆世界とが今この寶塔の位置に依つて指示するが如く相通して居る、との旨を明す。「此土體一」即ち娑婆と通うて一ツに成つて居るといふのである。それを體一といふ。「常寂光」とは前に云ふが如く如來の世界即ち常寂光土を云ふ先きにも云ふ通り土に四土とて四ツの國土がある、それを示せば。



何うして斯うした國土の差別があるかと云ふに、佛教では其人々々の果報に依つて住む所に區別が立つと説く、上の圖表は人の果報を現はしたもので、業感緣起とか業報所感と云ふのが因果律の上から定



められて居る佛教哲學の原則である。業とは心の活動性に名けた名であつて、その業と云ふ心の活動性に因つて、種々の縁を造り、因を造り、果報を引くと云ふのである。今の本文に就て云ふならば、此土たる娑婆と、淨土たる如來の常寂光の都とは相通じて居るのである。が、業報所感の上から區別が立つと、どの意をホノメカシ給ふたのである。「體一」とは娑婆が其まゝ寂光土であると云ふのではない相ひ通じて居るの謂である。(次續)

燈火親書の秋

さくめう

- ◇電燈の明るさは一燈當り十ワットが適當。
- ◇電燈の點滅は壁や柱に取付けた點滅器に依ると電球の壽命がヨリ永く保てる。
- ◇電燈の笠は深いものが、外面青色か又はグロリアを用ゆるが目によい。
- ◇安いと思つて買つた電球は元角電流を多く要し、早く切れ替です。

- ◇電燈線から使つて安全な電氣器具は五〇〇ワット以下です。
- ◇コードを釘にかけたり、丸めたり、障子や建具の合せ目に挿み込むことは御注意。
- ◇電燈の上から布をかけた時、紙で覆ふことは危険です。
- ◇睡眠の時は必ず消燈。

旅

昔は旅は憂いものつらひものとして「可愛い子には旅させろ」と申す位でありましたが、今は旅こそ最も愉快なものとして、又見聞を博むる上に於ても最も効果多きものとして、人々から翹望される一つであります。

毎日都塵にまみれ、一週間を八日に働きつゝあつた自分にも、今度盛岡から講習會に出かけて來ぬかとの招信に接し、そこにはかねてより敬慕禁するほどの出來ない中村市長や小林博士等も久し振りにお目にかゝれることゝして、これ 佛天の妙なる御計ひとばかり大悦びで 九月二十一日の朝八時半、小雨の降る中をば市電に飛乗つて上野へと向ひました。

上野驛九時廿五分發の仙臺行準急に乗る。幸にも

磯部満事

座席が悠くりとされたので、落ち付いて少々書見に耽り思はず二三時間を過ごして、不圖目を窓外に放つた時、どんより曇つてはゐるが、此の邊は最早雨もなく乾き切つた白い埃のたつ大道と、豊穡な黄金を敷き詰めた様な満作に、刈り採る乙女の姿が見受けられた。

暫くして宇都宮に着く、相當の乗降客で賑つたが恰度正午には矢板驛で、こゝより鹽原へ行く近道といふ札が目につく。此邊、萩、鶏頭花、シオン、百日紅等々秋の色華が自然のまゝに咲き亂れてゐる。さうかと思へば或は山あり、河あり、雑木林、桑畑薄の野、全く目まぐるしい、而して田は實成り、畑に秋茄子が淋しく残つてゐる。



「田舎の景色を走る車窓から眺めてみると、一切を忘れて全く大自然の温い微妙な懐に抱かれてゐるやうに感ぜられ、ハット己に還つた時に、オ、田舎の人々は幸福だナア」と羨ましく思ふ。併し其等の人々は乾度、都會の華々しさに憧がれて、塵の多い中でも好んで集まつて来る、田舎は淋しくてつまらぬ何も楽しみがない、不自由だ、不便だ、厭はしいと聞かされるでしよう。

實に人の心持は不思議なもの、自分の椅子よりも人の座席がよく見える、人の境遇を羨ましく思ふ。多くの人は各自の觀念で境地をいかやうにも認識せんとする。此世界を穢土と見るのも淨土と思ふもそれは主觀からとするのが普通の考へ方のやうである。出来たり消えたりするものでなく、それは事實の存在せるを説いて居る處に勝れた點があると思ふのです。即ち田舎は田舎として、都會は都會としての實在であつて、決して假空的の存在ではないやうに穢土も淨土も立派に實在せるものであると信ぜられる。しかく天地は無言の間に、いろ／＼私共に大き

されつゝあるのではありますまいか。

こんな事を考へながら刺激をうけた六感を車外に投げかけると、さて道を行く人を眺ても、途中から乗車する婦人でも、さては小學の校庭に遊ぶ學び兒であつても、流石田舎の純朴さが保たれて、都會に見るやうな毒々しい、齒の浮く様な恰度北米の下町で見受る如き野卑な洋装の不恰好な婦女子に接しないことが、いかにも嬉しくて有難い事と涙がこぼれる。紅粉の粧なき自然の姿に、綿服を纏つた乙女を見る時に、其の氣高さに合掌せずには居れない。假令それが境遇上から已むを得ざる見すばらしい姿であつても、或は華美の弊風が未だ襲はず知らざる者にせよ、即ち彼女の自覺のあるなしを問はず、當其の有りのまゝの自然に親しみ、質朴純情な風俗を見ては、心の中に無限の喜びと力強さを感じて、愉快この上もありませんでした。何時迄もこの純眞を失はぬやう。否更にこれを都會の浮草の如き虚榮の權化らしい子女に、反省し悔悟せしめたいものと念願して止まぬ次第であつた。

な活訓を明示しつゝあることに心づいた時、自から敬虔の念が涌き出づるでしよう。

平田國學者はこんなことを示されて居る。

「一體、眞の道といふものは、事實の上に具はつてある。然るを兎角、世の學者などは悉く教訓といふことを記したる書物でなくては道は得られぬ如く思つて居るが多いで、こりや甚だの心得ちがひなこと、教と申すものは事實よりも甚だ低いものでござる。その故は、實事があれば教はいらず、道の實事が無き故に教といふことが起る——實が無くて、その書き列ねたる處ばかりが立派では、そりや山賣りの能書を見たやうなものでござる。これらのわけをば夢にも知らず、教への書物でなければ道は得られぬ、教導にはならぬなど、思つて、世の常の學者や道學者などいふ輩が、そればかりを唱てゐるといふは、かたはら痛いこととござる」云云。

我國は元來「言あげせぬ國」と太古からいひ傳へられ、不言實行を尊ばれて來た風習に、私共は、口よりも、筆よりも、身に行ふことを大自然から指示

かく考へつゝある間にも、私共を乗せた汽車は疾走する。午後一時四十五分郡山驛着、その篤信家五十嵐治郎左衛門氏をお訪ねした。同氏は恰度横須賀方面へ商用で廻られて、漸く昨日歸宅されたばかり、お勞れの中をば、一列車遅くさせた半端時間について、いろ／＼のお話を承つた。

念佛から禪宗へ、而して今は教學に於て顯本第一なりとの確信を以て、其商業の餘暇を割いて熱心に他へも信仰の必要なるを薦められつゝある稀有の士で、體驗あり又立志傳の人である。其數あるお話の中に最も強く感じたことは「日蓮宗の人々も禪宗の如く抱擁の大度量あつてほしい、而して信心の態度は念佛宗の如き柔和質直であり、專念不動を望まじい」との事であつた。

日蓮聖人の其抱擁的な、開顯統一主義を後世に認るものが多く、宗祖の涙もろい情緒の纏綿たる達徳をば、折伏逆化の一面で覆ひ切らんとする如きことが、いかに聖人を世上から曲解せしむる大禍なるべきを思つて、長嘆を禁じ得ません。ある有名な文士



が「日蓮上人は上行の再誕であるとの確信を得てより、彼の性格の偉大は、殆んど人界の規矩を超越し其意志と情熱とは、天下萬民に向つて、無上の權威者なりと教訓し、告知し、命令した。この確信の前には時の爲政者も、僅かの小島の主と輕んじ、天照大神、正八幡も、小神なりと卑しめた。従つて一切衆生は帝王も乞食も、悉く皆一小兒となり畢ぬ。如何に雄大崇嚴を極めたるか、吾人は唯歸命讚歎して、唯々の一語を反覆するの外無い」等、かゝる一面觀が、如何に青年の思想を指導したか、最近の世相を眺めた時に辣然として肌寒きを覺ゆるのであります。群盲撫象の類、世を毒し、人を紊る罪極めて大なるものでありませんか。嗟。

同三時五十一分、御多忙の中をば御自身に態々列車迄お見送りを戴き、再會を期して福島へと向つた。

郡山から福島へは一時間あまり。

驛には意外にも岩井、中村兩法兄がお出迎へ下さ

姉の御懇情に浴しつゝ、目的の盛岡へと向つた。

沿線悉く初めての旅とて物珍らしく、鬱蒼たる雜木林の中を抜けたり、名も知らぬ河原に野飼の馬が點々として番人も近傍には見えぬのどかな風情は一幅の活畫である。遠くに聳えた山、やがてその裾からすべり込むこともある。山又山と續いたり、又やがては廣々した沃野に、十二分に實のつた重い頭を下げてゐる稲穂、等々を見、いろ／＼の活訓に浴しつゝある間に、速度が緩かになつた、そこは仙臺驛であつた。

仙臺には知友もあることゝて、八分停車にさへ永い感じはせず、一寸市中を散歩して見たい氣分が起つた。殊に有名な松島にも心を引かれつゝ……やがて一の關も過ぎ、水澤の聲に和賀上人を偲び一段と敬意を拂ひ、漸く午後三時を過ぐると間もなく盛岡驛に到着した。

構内には中村市長を始め小林博士や田口上人其他多數の人々が見えた、それは恰度佐藤中將と客室こそ逢え、同一列車であつた爲めに意外の歡待に浴することが出来たのである。

つたのは全く恐縮千萬で、内心空恐ろしく感じた。十一ヶ月振りに福島之地を踏み、懐しい人々にもお目にかゝれて大きな歡びであつた。唯一つの憂ひは金澤夫人の御賢息が入院されてゐた事である、然しそこには奇蹟的に一命を取り止められて、數日中に退院さるゝ迄に快癒されて居たのは何よりであつた御全快の上は其の貴い御體験談を承りたいものと奇かに期待してお別れした。

午後七時から、大町の中村家で座談會を開催しようといふので、中村夫人始め幹部の御熱誠で、嗚嗟の間に二十餘名の参加を見、又高商讚仰會員も試験準備の忙しい中から數名來會されたことは感謝の至りで、一同修法後岩井法兄の御紹介に續いて「彼岸と信心」といふ題で、約一時間半ばかり話した。それより各自の意見交換に移つて、佛誕年代に關する事柄や、貝多羅樹の事、法華經研鑽方法等に夫れからそれへと華が咲き、十時半頃迄賑つて楽しい法筵であつた。

廿二日朝七時四十五分の列車で、中村、金澤兩法

盛岡の地に來て深く感せしめられた事は、第一に人々の親切であることが嬉しかつた。従つて言語も動作も極めて丁寧である、浮華放縱の如き、輕佻詭激の態度は數日の滯留中に少しも見出し得なかつた事は最も心嬉しく覺え、この事實を未知の方々に出來る丈け御紹介致したく思つた。ある人が市中を散歩してゐた時に、不圖下駄の鼻緒が切れたので、困つて居るのを見た六七歳の子供が、直ぐ家の中にかげ込んだかと思ふと、やがて主婦らしい婦人が出て來て鄭重に叩頭して、「嗚お困りでしょう、一寸これをお召し下さい、直して進ませう」として一足の駒下駄を出された。其人は感激し乍ら待つ程もなく完全に前緒を修理して、そこには少しも態とらしい、又街ふやうな態度はなかつた純情に、いたく動されたとのことでした。これは敢て旅の人に對してのみでなく、すべてがさうだと聞いて一層美しく感じ

た。

廿三日は秋季皇靈祭で、この朝、中村市長自らの



御案内で、佐藤中將と同乗市中見物に數時間を費した。處が中央の賑かな場所は勿論の事、場末の淋しい軒家でさへもが、各戸に必ず國旗が扁々として翻つて居たのには流石に佐藤中將も、ナントいふ氣持のよい、美しい事でしょうと賞歎された。無論これは日蓮市長の異名ある中村謙藏氏の、極めて家族的なお骨折りで、そこには貧しくて買へぬやうな家には自ら旗から、竿から、球からの一掃を求め與へられたりして、祝祭日には必ず國旗を掲ぐべきものだとの眞情の結晶が、この愉快な貴とい事實を見せられたのであつた。

日蓮大聖人の絶叫された立正安國は決して高き彼方にあるのではなく、この脚下の私共の日常の中に見出し、實現せしむることが聖意ではあるまいかと思ふ時に、一を以て萬を察せよ、盛岡の市民は幸福であることを大に祝福するものであります。

先頃この地法華寺へ轉住された 田口上人から承る處に依れば、お盆には、それこそ驚歎せしめられる。先づ三時頃から檀徒のお墓参りが行はれる、從

つて廣い墓場一面に電燈が點せられ、人々は紋付羽織袴の禮装で、家族郎黨を引連れ、第一番に御本尊に参拜し、次で自分の祖先の墓に華香を供へ、それより知友の展墓といふ有様であるから、境内は人々繰るやうな賑しさが續くこの事である。この話を聞いた時に、成る程岩手からは偉人が出るといふ其の本因は那邊にあるかといふことが、よく讀める心地がしたのであります。お互によいと思へば、今日から直ちに實行しようではありませんか。せめて主、師、親の御命日には、是非關係深い處へ参拜するやうに勤めたいものです。

盛岡に關する雜感は多々ありますが、それは他日を期して、今一つ特記したいのは市中を距る數里の下平村大川邊の事である。

現在でも村民は米麥を常食とせず、舊慣を墨守し、稗粟等の粗食に満足し、而かも堂々たる體格の持主であることは、何んと新しがり屋、乃至生活苦をかこつ人々の三思を要望して止みません。

又南部馬が、日本一と稱讃される迄になつたその

◎新 加 盟 者◎

東京市本郷區駒込神明町十一 清水 寅 夫殿

(河合珍明氏御紹介)

同 品川區南品川三ノ一五三八 城 戸 龍 吉殿

同 下谷區入谷町八九 人 見 其 治殿

(沼部彌太郎氏御紹介)

神戸市須摩區水笠通り二ノ十一ノ一 橋 本 定 雄殿

(丹生侍太郎氏御紹介)

裏面の美はしい事實は、數々ありませう。日支事變に際しても軍馬とそれの輸卒との間にあつた涙ぐましい物語りも、それは一朝一夕の出來事では決してなく、奥深い貴いものがあります。實に活きた事實ほど貴い教はない、旅はよいものです。

僅か數日の旅行で、物珍らしさに心を奪はれて、幾多の貴い事實に接し乍ら皆見逃がせました。漸く其の一二の點でも腦裏に強く刻み込まれた事は全く本佛の妙化、毎自の悲願として有難く感謝し、更に一層驚馬に頼たんとするものであります。合掌





# 記事

## 非常時の國民精神作興

来る十日は、先帝陛下が國民精神作興に關する大詔を煥發遊ばされてから。滿十年に相當するので、中央及び道府縣教化聯合團體が主催となつて、各方面の協力を得、全國一齊に一大教化運動を起すべく、左記の要項が各關係方面に移接せられ、その趣旨の徹底と目的の達成に就き本團にも格外の盡力を求められて来た。

### 一、趣旨

「國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ」我徒この聖旨を奉體して策勵奮起、その徹底を期すべく盡力を傾倒する所あり。之れを以て既に教化の大綱略々整へるものあるを見るも、時局の變轉日に甚だしくして、之れに對應すべき方法尙未だ備はらざるに、今又未嘗有の時艱に遭遇せり。

偶々本年十一月十日は、先帝この大詔を煥發せられ滿十年に相當す。その「今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスンハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル」の詔、尙炳乎たるを拜すれども我徒の盡力、遂に聖慮の萬一に奉答し得ずして今日に至る、眞に恐懼に堪へず、茲に既往を省み更に現下世局の彌々重大なるに想到して感慨盡るなし。仍ちこの記念の時を迎へて、茲に精神作興週間を設定し、新にこの

聖旨を奉じ且今次國難最難に際して賜りたる詔書の御趣旨の普及徹底を圖り、以て非常時國民の精神を振作し、自力更生の意氣を喚起し、舉國振興の實を擧げむことを期す。

### 二、強調要目

- 一、國民相戒メテ自己ヲ反省シ家族的協同生活ノ本義ヲ自覺セシムルコト
  - 二、非常時日本ノ真相ヲ明知シ舉國振興ノ秋タルヲ痛感セシムルコト
  - 三、克己忍苦ノ修練ニ耐ヘ剛健ナル國民精神ヲ振作セシムルコト
- 詔書煥發記念日たる十一月十日を「克己日」とし、その後七日より十三日までの一週間を精神作興教化強調週間と定めて、全國一齊に運動の徹底を期すべく、それには懇談會、座談會、講演會其他適宜の集會で時局の真相を熟知せしめ、又克己忍苦によつて節減し得た餘財は、額の多少を論ぜず之を贖出して軍資金、國防資金、出征軍人並家族慰問金、國債償還資金其他公共施設資金に献し、又は各自貯金或は共同積立金に充つることに各方面へ通達されたのである。

定に興國の氣運は民心の作興からであれば、文部省宗教局では前記「精神作興週間」に際して、國民精神の指導的立場にある宗教家の奮起が是非必要であるとし、下村宗教局長の名を以て各派管長及び基督教の重立つた者へ適切な施設實行するやう進達書を發送された。

# 教報

## 本部 團報

法華經講座 小林一郎先生に依つて毎週木曜日晚七時より八時三十分に来る妙法蓮華經の講座は、各方面の士女に歡迎され毎回續々として新加入者を見、今や帝都に於ける最も意義深き講座の一なりと稱讃されるに到つた。

日曜日講演 秋季彼岸會の法要と講演會をば九月二十四日第四日曜日の例會を充當して、多數來會のもとに修法後左の通り長講三時間に亘りて熱誠に披露された。

萬古を貫く大精神 男爵 井上清純閣下

十月一日 第一日曜日午後二時  
開目抄に對する日蓮聖人の地位 河合勝明氏  
立正安國の實現 和賀義見師

同八日 第二日曜日午後二時  
一念三千論(開目抄) 河合勝明氏  
信仰漫談 藏部滿事氏

同十五日 第三日曜日は特に日蓮聖人の御會式を慶祝すべく、午後六時法要を相替み、六時四十分より左記の順序を以て講演會に移

つた。

開會の辭 藏部 滿 事氏  
立正安國は蓋所より 小石川高等女學校長

挨拶 河合 勝 明氏  
國防より見たる太平洋問題 海軍中佐 柴田善治郎氏

閉會の辭 梶 木 顯 正師  
當會館最初の御會式であり、宗祖六百五十二年の御會式は一年一度しかない、私共は衷心から貧弱ではあるが至誠を以て奉仕せねばならぬ。幸にも當日は多數の參詣者に滿され意義深い謝恩の一端に擬し得たことを歡ぶ。且つ又石毛、西村、和田、高田等の各夫人が誠心を籠めて製られた玄米おはぎを、一つは經濟上玄米試食用としての意味も含まれて、滿堂百餘の來會者へ夫れも御供養が出来た事は有難い次第と思ふ。

同二十二日 第四日曜日午後二時  
佛敎哲理の歸結としての一念三千論 開目抄 河合 勝 明氏  
唱題成佛の意義 梶 木 顯 正師  
地方布教 藏部滿事氏は九月二十一日福島支

部座談會、同二十二日より二十五日迄盛岡市に高講す。後記参照)河合勝明氏は同二十五日より二十七日迄名古屋に出講す。名古屋は久しく本多親下の法雨に潤つた處であり、御遷化後同地常樂寺の原田日勇師教線を連められて居るが、今回同地自慶會の招聘に應じて河合講師は、本多親下の多年の工場講話の感化の跡著しき豊田紡織株式會社及び豊田式紡織機製造會社の男女工三四百人より千人に及ぶ各工場へ、六回に亘りて「人及び國民としての修養」といふ講話を爲し、二十六日夜は教化會館に於て、立正會主催の下に『法華經と日本國と日蓮聖人』といふ信仰講話を爲した。同地信佛士女の熱誠と純潔には何時もながら深く感激し、親下の人格的感化の偉大なりしを思ふ。又豊田式紡織機會社の取締役土屋氏等各社の經營者の方々が、一觀念を中心として我國の正當なる經濟産業的發展に貢献せられ居るは欣懐感銘の至に堪へなかつた。我等はやがて又再會活動の時機もある事であらう。同地の思想教化的發展を祈つて止まない。南無妙法蓮華經



橫濱教誌

九月四日 夜 神奈川藤原町佐藤氏方にて集會『日蓮聖人の唱題行』磯部先生
同日 午後三時 生麥貝塚氏方にて集會小西日喜師、磯部先生御來講。同夜引きつゞき磯子高橋氏方にて集會。查問の外に和賀義見師も分えられた。
同十一日 夜 神奈川鶴屋町京田氏方にて集會。『道難と法悦』磯部先生
同十六日 午後三時 神奈川二本榎町金子氏方にて集會。和賀師御來講。
同十九日 夜 中區高田氏方にて集會。『信仰の基礎』磯部先生。
同二十四日 午後二時 子安淺野中學の門前に建てられた大悲院克難疾得日壽信士の供養塔前に會員一同參集、信士やその他の殊死者のため彼岸の御廻向をした。
同二十七日 夜 神奈川三ツ澤齋藤氏方に集會。小西師及び前夜盛岡布敷より歸られた磯部先生御來講。
同二十九日 夜 磯子北山氏方に集會。『生活の本義』磯部先生

盛岡教信

九月十八日 於法華寺 日支事變滿二周年殉難者追悼會と記念教化講演會を開催し、市内八遺族を招待せり。
按 抄 住 職 田口 公信師
時局之信仰 醫學博士 小林 茂雄氏
非常時局の解剖 陸軍大佐 國崎 登氏
同二十二日 於縣公會堂 立正會主催となりて時局講演會を午後六時半より開催し滿員の盛況を呈せり
開會の辭 醫學博士 小林 茂雄氏
國際聯盟離脱詔書排讀 盛岡聯隊區司令官 國崎 登氏
現下社會狀勢と日蓮主義の本領 財團法人統一團理事 磯部 滿事氏
非常時日本の展望と對策 海軍中將 佐藤卓藏閣下
按 抄 盛岡市長 中村 謙藏氏

同二十二日より二十五日まで秋季彼岸會を擁護し毎日午後一時より法華寺に於て修法後佛敎講習會を開催せり。講師は磯部滿事氏にして『法華の信』と題し懇説され、來聽者毎回百餘名に達し法益に富み。

幕張教報

地方の教化運動は第一に時期を考へねばならぬ。道人樞木師は自坊長龍寺の盆會を中心として暑夏八月の苦熱を克伏すべく、一般地方人の盆氣分て幾分仕事もゆるやかな八月の十九日から二十八日にかけて左の如く、自坊長作を基點に一里四方の部落で夜間納涼教化講演會を開いた。講題は何れも『國民思想と宗教』
八月十九日夜、習志野聯隊前大久保町銀座
通
(二十日夜、東京統一團江戸川公園前)
廿一日夜、長作區内辨天前
二十四日 午前十時より於自坊日支事變戰病死者追悼法要執行、町長區長等の燒香あり
同日 午後同益會法要執行
二十五日夜、長作新田檀徒秋山善次郎君墓前
二十六日夜、坊邊田水神社前
二十七日夜、實想區中央十字路
二十八日夜、大和田町高津新田大木與平治氏前

十月六日は縣公會堂に於て縣市聯合の經濟更生講演會並に映畫會を開催し、遠藤盛岡市産業課長と法華寺田口公信師出講の筈。
寄附維持金團費誌料領收
(自九月二十一日至十月二十日)
一金貳圓貳拾錢也 東京 片岡勝太郎殿
一金貳圓貳拾錢也 同 須藤 仙吉殿
一金壹圓也 同 加藤重太郎殿
一金貳圓也 同 内木 なつ殿
一金壹圓貳拾錢也 同 小峰 豊子殿
一金壹圓貳拾錢也 同 清水 寅夫殿
一金壹圓貳拾錢也 同 千葉縣 中村正次郎殿
一金貳圓貳拾錢也 同 横濱 西村 喜勢殿
一金壹圓也 同 東京 總引 弘殿
一金貳圓貳拾錢也 同 茨城縣 總引丑之介殿
一金貳圓貳拾錢也 同 東京 城戸 龍吉殿
一金貳圓貳拾錢也 同 同 人見 其治殿
一金貳圓貳拾錢也 同 同 日下部二葉殿
一金貳圓貳拾錢也 同 同 横山 正三殿
一金貳圓貳拾錢也 同 同 柴田 武治殿
一金貳圓貳拾錢也 同 同 寺澤 高三殿
一金貳圓貳拾錢也 同 同 濱松 三谷邦太郎殿
一金貳圓貳拾錢也 同 同 静岡縣 桑原 斌有殿

二本松教信

師一人舞臺だから短い時で一時間半、長い時には二時間にも及んだ。聽手は青壯老年の各級を通じてだが特に青年が多かつた事は誠に嬉しかつた。二十七日の賞報では眞言宗無量寺の住職本多師と二人で聞いた。長龍寺の信者達は連夜樞木顯正師の後から應援について廻つてゐた。毎夜地方の青年で自轉車で運きたつたかと思つて」と聽講に来る者もかなり認めた。檀徒秋山善次郎氏が終始通してメカホンに施本及チラシ配りに奉仕して居たのは一寸人目を引いた。今後も斯うした會を開いて欲しい、との話も出て居るから多少効果も考へられるだらう。
九月一日 夜於蓮華寺題目講修行
同 六日 午後九時四十二分二本松聯通にて旭川部隊渡滿す因つて見送す。
同十三日 免因保護事業安達佛敎慈善會秋季托鉢修行
同十八日 夜於蓮華寺題目講修行
同二十九日 貧困者保護事業二本松佛敎不染會托鉢修行

右難有入帳仕收候也

財團法人統一團會計

神戶 橋本 定男殿
青森 柏木 吾市殿
東京 佐藤 和市殿
大宮 きぬ殿
山口 小高 與吉殿
千葉縣 風戸 三藏殿
同 山 高矢 憲教殿
横濱 川島 清稔殿
東京 山田 英二殿
京都 大親秀三郎殿
大阪 小田末治郎殿
東京 木村 日保殿
同 木村 聰八殿
同 同 竹内 軌榮殿
弘前 同 同





本多日生上人名著在庫品特價提供

- 一 聖語 錄 改版 特價 金壹圓八拾錢
  - 一 日蓮主義本領 送料共 金貳圓拾錢
  - 一 法華經要義 賜天 全 金貳圓五拾錢
  - 一 日蓮主義心髓 全 金壹圓五拾錢
  - 一 日蓮主義精要 全 金貳圓九拾錢
  - 一 佛教の本質と其價值 全 金貳拾五錢
  - 一 法華經要品 全 金五拾錢
- 磯部滿事謹輯

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
 財團法人 統一團出版部  
 振替東京〇二四九番

一月「教」誌

定價一冊 金拾五厘  
 送一年前金料 金壹圓貳拾錢  
 送料共 金拾錢

申込所

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
 「教」發行所  
 振替東京一〇九四〇番

目次

本佛の感應……………	日生上人
日蓮教學講座(第三回)……………	河合 陟
日什上人諷誦章講話(其六)……………	梶 木 顯
所感……………	齋 藤 實
思親閣への道……………	貝 塚 生
記事……………	

○本部團報並に各地教信

○寄附團費誌料領收

第三十八年十二月號

統一團定價  
 一冊 金貳拾錢 送料五厘  
 半々年 金壹圓貳拾錢  
 一々年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意  
 ▲御申込ハ總テ前金ノ事  
 ▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可  
 致候  
 ▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御  
 通知ノ事

昭和八年十月廿四日印刷納本  
 昭和八年十一月一日發行

(第四百六十四號)

不許複製

東京市小石川區音羽町六ノ一七  
 編輯兼 磯部 滿事  
 發行人 磯部 滿事  
 印刷人 鈴木 日雄  
 東京市品川區南品川二ノ一八一  
 印刷所 都 印刷所  
 電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團  
 電話牛込五三三六番  
 振替東京九四二〇番